シンポジウム報告

「ものの人類学」から地域研究を問い直す

崔 真碩

1．「ものの人類学」との出会い

今回、シンポジウム「資料から問い直す地域研究のあり方」に参加して刺激的だったのは、午後の部の「人とモノのエージェンシー」の議論、なかでも床呂郁哉氏のお話だった。

私の専門は、朝鮮文学と東アジア文化論である。普段から学際的に文学・文化研究しているつもりではあるが、床呂氏が中心になって展開されている「ものの人類学」の存在は初めて知った。しかし、初めての出会いではあったが、文化人類学において現在、とても重要なパラダイムチェンジが起きていることは直感しえた。

床呂氏は、ご自身が編集された『ものの人類学』（床呂郁哉・河合香吏編、京都大学出版会、2011）の序章で、従来の物質文化研究に対する問題提起とともに、新たな「もの」とひとの関わり合いにもとづいた「ものの人類学」の可能性を以下のように示唆している。

> だが、「もの」とひとの間に起こる相互作用の実態を長期にわたって子細に追うことによってあきらかになったことは、従属的で従順な客体であったはずの「もの」たちが、客体であることを「やめる」という事態が少なからずある、という現実であった。これまでの物質文化研究における理論的枠組みや視点からは見えてこなかった、あるいは見ようとしてこなかった事態であるが、われわれの生活世界を満たす「もの」たちは、しばしばひとによる操作や管理や思惑に抗い、そこから逃れてゆく御し難さを顕わにする。この本の中でわれわれは、従来の人間中心主義的な「ひと／もの」関係の構図を解体し、そうした循環論を越えてゆくことを試みる。それは、「もの」たちがそれ自体のうちに孕む能動性や主体性、のっぴきな

らない力やポテンシャルに注目し、そこにこそ、「もの」とひとの関わりあいを正当に評価する方途をみいだそうとする態度であると言ってよい（3〜4頁）。

門外漢であっても、この序章の言葉を読むだけで、知的好奇心が掻き立てられることだろう。とりわけ、「もの」たちの「しばしばひとによる操作や管理や思惑に抗い、そこから逃れてゆく御し難さ」や、「もの」たちの「それ自体のうちに孕む能動性や主体性、のっぴきならない力やポテンシャル」という言葉は、豊かな想像力の広がりとともに、私たちの生活世界を満たす「もの」たちとの出会い直しを予感させる。

だが、私に最も説得力をもって「ものの人類学」の言葉を響かせた「もの」は書物ではなく、ほかでもない発表されている床呂氏の声と眼だった。私がそのとき目撃したのは、まさしく、「もの」の御し難さやのっぴきならない力に圧倒されて恍惚としながら、快楽を感じているひとの姿だったのだ。そんなひとの発表を聞いていて、楽しくないわけがない。

2．地域研究のあり方をめぐって

あの日、結局はタイムオーバーで、シンポジウム「資料から問い直す地域研究のあり方」の本題である地域研究のあり方をめぐって議論することはできなかった。おそらく、シンポジウムに参加した皆がそのことを心残りに感じたことだろう。しかし、「資料から問い直す地域研究のあり方」について考えるとき、「もの」の御し難さやのっぴきならない力に圧倒されている床呂氏の声と眼にそのヒントがあるように思う。たとえば、「もの」を「地域」に置き換えて、「ものの人類学」で提示されている新たな「もの」とひとの関わり合いに関する言葉を読み直してみてほしい。すなわち、以下のように。

「地域」のしばしばひとによる操作や管理や思惑に抗い、そこから逃れてゆく御し難さ。「地域」のそれ自体のうちに孕む能動性や主体性、のっぴきならない力やポテンシャル。そして一度、以下のように自問してみてほしい。私はいま、「地域」の御し難さやのっぴきならない力に圧倒されているだろうか、と。

先述したように、私の専門は、朝鮮文学と東アジア文化論である。私自身、地域研究に関しては、二年前に広島大学に赴任してくるまでは、我が身のこととして考えてこなかった。いま現在、大学での仕事に慣れつつ、地域研究について考えはじめているところだ。もちろん、語学教育も含め、これまで朝鮮研究・教育に携わってきているわけだから、地域研究に対する感覚は持っているつもりだ。しかし改めて、「地域研究とは何か」を考えてみると、言葉に詰まってしまうのが正直なところだ。

ここでわざわざ、（とりわけアメリカの）地域研究が孕んできた／いるオリエンタリズムや植民地主義を批判するつもりはない。それはすでに多くの論者が行ってきたことだ。それよりも、私はいま改めて、「地域」の御し難さやのっぴきならない力に圧倒されたいと思う。このとき、私にとって、「地域」とは朝鮮である。日本、沖縄、台湾、中国、そして広島――。朝鮮人の客死した死者たちの痕跡を辿るとき、浮かびあがってくる東アジアだ。

しかし、それでもやはり、恍惚としてばかりもいられない。私はここで、しばし現実に戻り、地域研究のあり方について考えてみたい。たとえば、総合科学研究科における地域研究としての朝鮮研究のあり方はどうだろうか。そのことを問うとき、私は、地域研究が孕む政治と向き合わざるをえない。それは朝鮮関係の教員が私一人であるということがすべてを物語っているように思うが、朝鮮研究・教育の置かれている環境は、欧米圏や中国など他の地域と比べて非対称的である。また、他の国立大学と比べても明らかなように、広島大学は、朝鮮関係の教員も授業も図書館所蔵の資料も圧倒的に少ない。

広島大学における朝鮮研究・教育のあり方の問題は、今に始まったことではなく、この大学の悪しき伝統なのかもしれない。また、この問題は広島大学に限らず、日本の大学全体に通じる問題でもある。さらに、歴史化して考えれば、この問題はこの国の百年の歴史と関わってくるとても根深いものなのである。

話は変わるが、現在、流行りの韓流ブーム。私は全否定するつもりはないが、しかし、拙い日本語で無理矢理に歌っている（歌わされている）韓国人の若手歌手の姿を見るたびに胸が痛む。同時に、植民地主義が継続している

ことを直感してしまう。韓流ブームは、その友好ムードとは裏腹に、日韓の非対称的な文化政治のあり方を示している。なぜならば、嵐や SMAP が韓国で、朝鮮語で歌うことなど絶対にないのだから。

最も身近な隣人あるいは「地域」のことを知らない（知ろうとしない）ことで、日本人が文化的・精神的に被ってきた／いる損失の大きさを自覚するべきだ。ほかでもない、地域研究に携わっている研究者こそがそのことを痛覚しなくてはならないだろう。

３．朝鮮語の呼称をめぐって

地域研究が孕む政治と関連する問題として、朝鮮語の呼称をめぐる問題がある。当然のことながら、朝鮮語の呼称をめぐる問題は、地域研究としての朝鮮研究のあり方にも関わってくる。たとえば、それを朝鮮研究と呼ばずに、「韓国研究」「コリア研究」と呼ぶ場合、そのあり方は大きく違ってくるのだ。

広島大学で現在「韓国語」として教えられている朝鮮語は、それ以外にも「韓国・朝鮮語」「コリア語」「ハングル語」など、じつにさまざまな名前で呼ばれている。日本による植民地支配の後に朝鮮が南北に分断されたことなどにより、さまざまな呼び名が生まれた。何と呼ぶかによってその人の立場を表しているかのように言われることすらある。

私は、日本語で「朝鮮民族」「朝鮮半島」「朝鮮戦争」と言うときと同じように、「朝鮮語」という呼び名が適切であると考えている。それは、「朝鮮」は総称であり、「韓国」は大韓民国（1948～）という正式国名の略称という考え方にもとづいている。

1948 年の朝鮮半島の南北分断以後、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）は朝鮮王朝の「朝鮮」を、大韓民国は大韓帝国の「大韓」を正式国号としている。ちなみに、大韓帝国とは、日清戦争と閔妃暗殺の後、朝鮮王朝が 1887 年に改称した国号である。大韓帝国は、日露戦争後に日本の保護国とされ、1910 年の併合で消滅した。日本では正しく認識されていないが、「韓国併合」と言うときの「韓国」とは、大韓民国ではなく、大韓帝国の略称である。したがって、「韓国語」と言うと、大韓帝国の言葉、あるいは 1948 年に成立した大韓民国の言葉という意味を帯びる。朝鮮の歴史的文脈にもとづい

て考えるとき、それは歴史的にも政治的にも偏った捉え方である。

歴史的にも政治的にも偏らず、時代を通して日本列島の隣にある半島の地域を呼ぶには「朝鮮」という呼び名が相応しい。ちなみに、「朝鮮」という地名はすでに紀元前四世紀頃からあったことが確認され、史記や管子に「朝鮮」という地名に関する記述がある。このことは、日本でこれまで、「朝鮮語」「朝鮮民族」「朝鮮半島」「朝鮮戦争」と、「韓国」ではなく、「朝鮮」が総称として使われてきた根拠にもなっていると考えられる。したがって、私は、学術的に日本列島の隣にある半島の地域を呼ぶときは「朝鮮」と呼び、そこで使われている言語は「朝鮮語」と呼ぶようにしている。

そもそも朝鮮語とは、1948 年に朝鮮が南北に分断される以前から、また 1910 年に朝鮮が日本によって植民地支配される以前から、ずっと当たり前のようにあり続けてきたものである。ハングル（文字）は、1446 年に李氏朝鮮第 4 代国王の世宗が、「訓民正音」の名で公布したものである。したがって、「韓国語」という呼称では、こうした朝鮮語の歴史的な時間をカバーすることができない。

朝鮮語はまた、南北朝鮮はもちろん、日本の在日朝鮮人、中国の朝鮮族、ロシア、ウズベキスタン、アメリカ、カナダなどでも日常的に使われている。これらにはごくわずかな違いはあるものの、同じひとつの言語である。したがって、大韓民国の言語を意味する「韓国語」という呼称では、コリアン・ディアスポラたちが生活しているグローバルな空間をカバーすることができない。この言語が持つ時間と空間をカバーするためには、「朝鮮語」という呼称こそが適切なのである。言い換えれば、「韓国語」では限界があるのだ。

朝鮮語の呼称をめぐる問題は、日本人の朝鮮近現代史に対する無知・無理解にもとづいている。その意味でも、日本における朝鮮研究・教育が担う役割は大きい。ことに日本における朝鮮研究・教育は、歴史的必然として、いつの時代もそうであるのかもしれない。

４．「朝鮮」の御し難さに圧倒されること

「ものの人類学」の話から韓流ブームの胡散臭さ、そして朝鮮語の呼称をめぐる話まで、話が多岐に渡った。だが、私が一貫して問うているのは、地

域研究としての朝鮮研究のあり方である。最後にいま一度、「ものの人類学」が提示している新たな「もの」とひとの関わり合いに関するあの言葉に立ち戻り、地域研究としての朝鮮研究を見つめ直してみたい。

「朝鮮」のしばしばひとによる操作や管理や思惑に抗い、そこから逃れてゆく御し難さ。「朝鮮」のそれ自体のうちに孕む能動性や主体性、のっぴきならない力やポテンシャル。

私は、「朝鮮」の御し難さやのっぴきならない力に圧倒されたい。しかしながら、その前に、「朝鮮」の御し難さやのっぴきならない力を開放するのではなく、むしろ閉じ込めようとする政治を転覆しなくてはならないようだ。「ものの人類学」が従来の物質文化研究における人間中心主義的な「もの」の捉え方を転覆しているように。

日本という主体によって客体化されてきた「朝鮮」を、日本中心主義的な捉え方から開放し、「朝鮮」の御し難さやのっぴきならない力に圧倒されること――「ものの人類学」との出会いから見えてきた、現在の私における地域研究としての朝鮮研究のあり方である。

（jinsoku@hiroshima-u.ac.jp）